風流
巳丑
孟春
文政
上
へ13
3782
1(1)
列女傳
版元
中
へ13
3782
1(2)
雪麿さくら園貞あづま
山
榮久堂
下
へ13
3782
1(3)

風流

上

巳丑

文政

へ13
3782
1(1)

門へ13
號3782
巻1

上

風流 仇討 三日月 吉野の傳

上之巻

清水琴女

巻之一

長くを繋げ、短くを切れと依估地よりる詞あるを、鶴と鳧との對句に違ひて、秋夜の千夜を一夜に欲張り、逢夜の短きを悲むあり、苦界十年と歎るを、年季の長さを愁るあり、宜哉長えと思ふ才は短く長短心よ限など、近頃合巻の流行も長く続くぞ年々よ、初編を、芋環のいと長き此山本の訛も色場たらぬ茶利あり、相續と、長物語を編とは、勧よ否とはそぞ、岩手山乃、頂辺所より掲る趣向の苦さ、無彼時の神くき、佛國も唐山の水滸傳、ちう三國志書場くる其後へのう、雑曰も見えたりと、彼劉向が古列女傳を、名のみ仮りて作生いん腹を本来無一物、俗聽の仮作

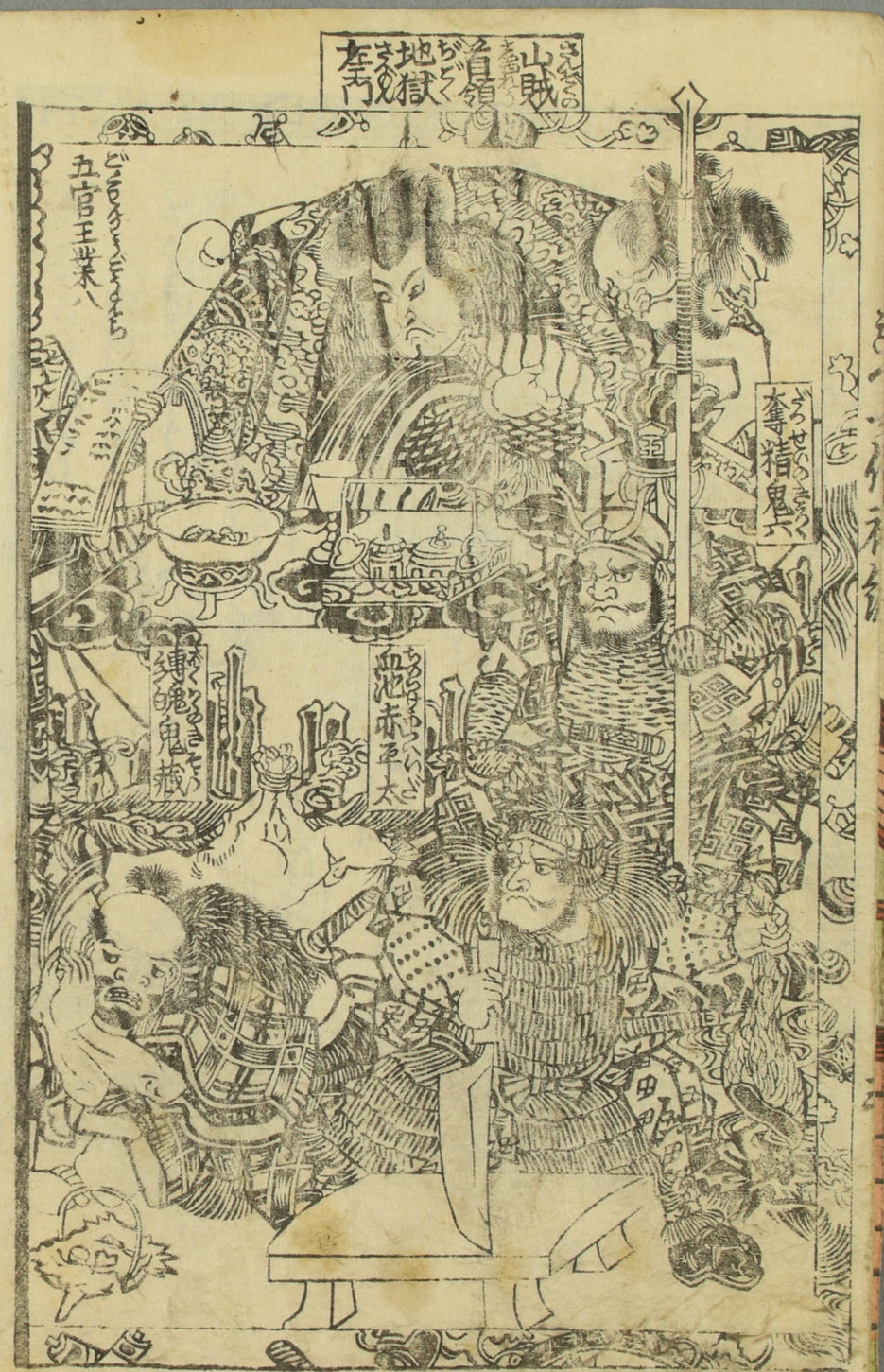
文政十二巳丑春發販　　里雪川亭雪暦作

進上
雪の下の町人
津國屋分左衛門
打諢
二朱判吉兵衛

愛甲の家臣
浅谷尾右衛門
大磯
三村屋
遊君
吉野
人呼ぶ
三吉と

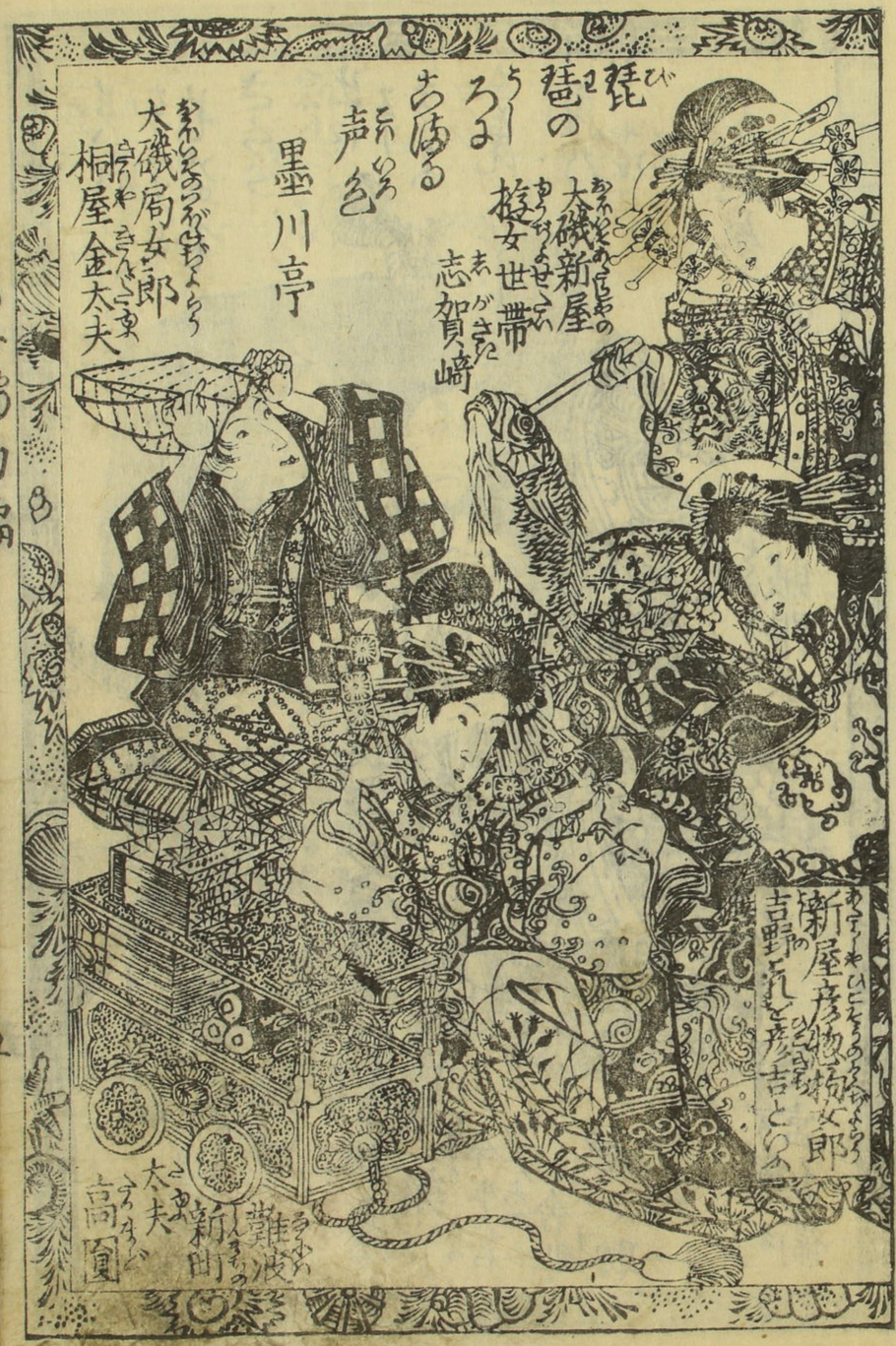
任侠念仏組の魁首
金時范兵衛

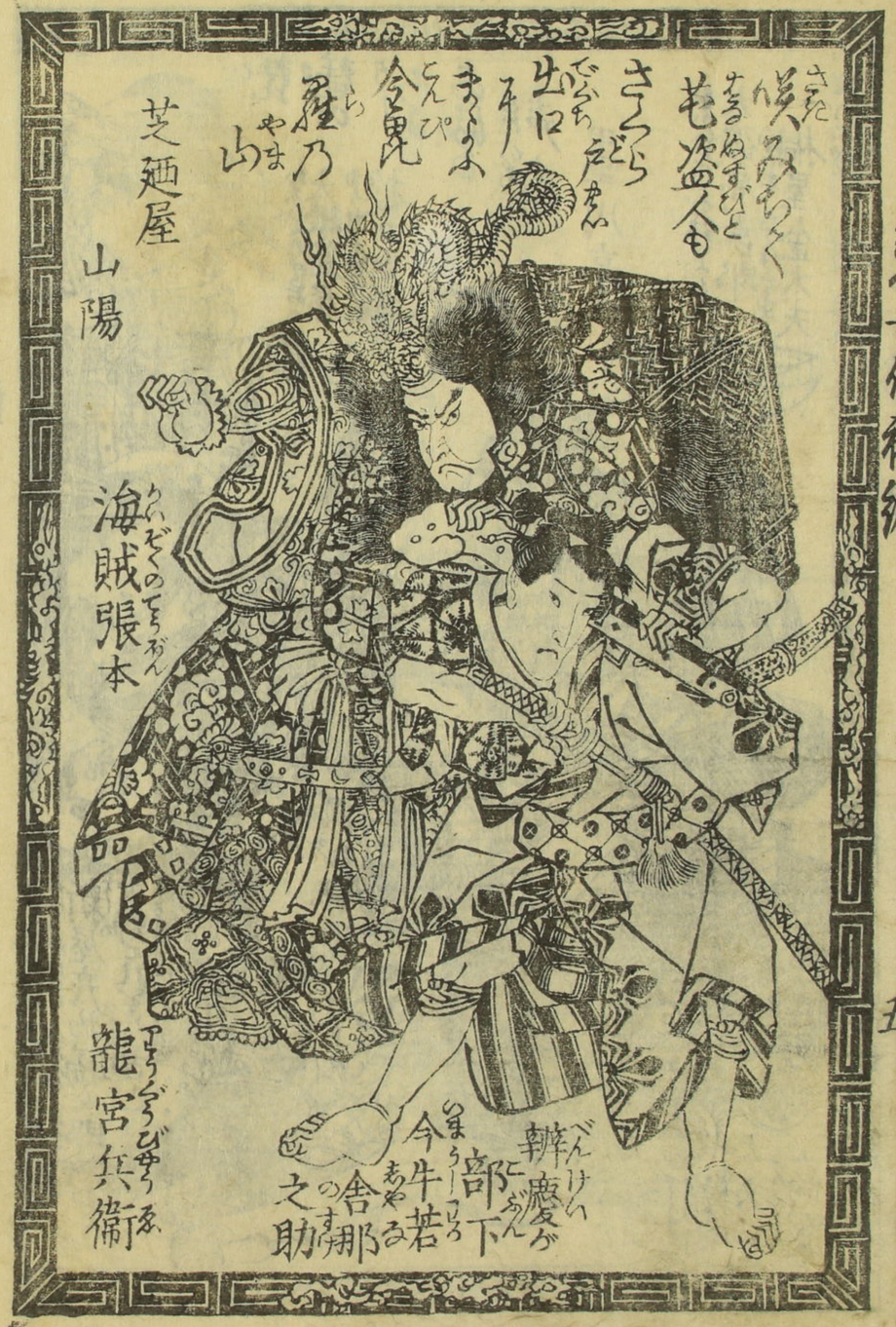
市川白猿
輪宝組の首長
辨慶他左衛門
鶴組の頭領
島兵衛


山賊
負領
地獄
左門
五官王業
奪精鬼兵
練鬼鬼蔵
血池赤平太

大紅蓮
永九郎
奪衣婆
予九郎
弁慶仲左門
玄房
紡績
奪魂
鬼八
頂吉
金平の
孫
范兵衛
金時

大磯三村屋
遊君子持
揚巻
大磯茗荷屋
散茶儿帳
みちの
の衣
大磯三村屋
傾城立花


琵琶の
うろよ
声色
墨川亭
大磯新屋
接女世帯
志賀崎
大磯局女郎
桐屋金太夫
新屋彦物部女郎
吉野とれと彦吉とのふ
難波
新町
太夫
高圓


芝廻屋
山陽
海賊張本
龍宮兵衛
舎那之助
今牛若丸
部下
弁慶が
輩

俵
分

山

俵

左の上の

右の下へ

つぎ たちまちるこれがたとえば
るこひるこれるんのものること
いさくらこれをしまいやとくさんの
うけぢをとりのぐりわくろのぐさろけ
あくくさてうのあぐくとろのたくへ
加ホうのくよあくりてつるだとあ
さる鳥づるじをせくろうの火をまりて
そのあくろをやたきりてあごそうよ
刃をきさよめつきいてそのきどく
わくんとそまつくりけさひあ
うさきさん

◆ 夜は入るをまちひびてあくうーよ
さまもふけゆくあんどのうえのあと
さわくとうやとひとく外のくるゆてぎあ
とさけごえをきこえのさろづーきよ
こもうおいあつ手をきうるひてそとゆく
真のでんてくるよゆびれ山をとと
ちくあのくろゆくーくらをまのまれ
あのまるとつゆをさられあろ
てんがくくくーきこいなくまひく
るゆくさゆまくくーきこいなくまひく
うけれがたろのちくく
とれさうけんくる
ちくをえをるりよ
ろりひゆうあ
さられ

◆ あんの
ごくめい
ごうのきどくを
あくふーくるとと
よくとびつあてくふれ
ある山をとこのうくよまくぶり
くぶさくのでーつきぎーゆそこぶ
とれとさーとれつくまる
ぢくきん

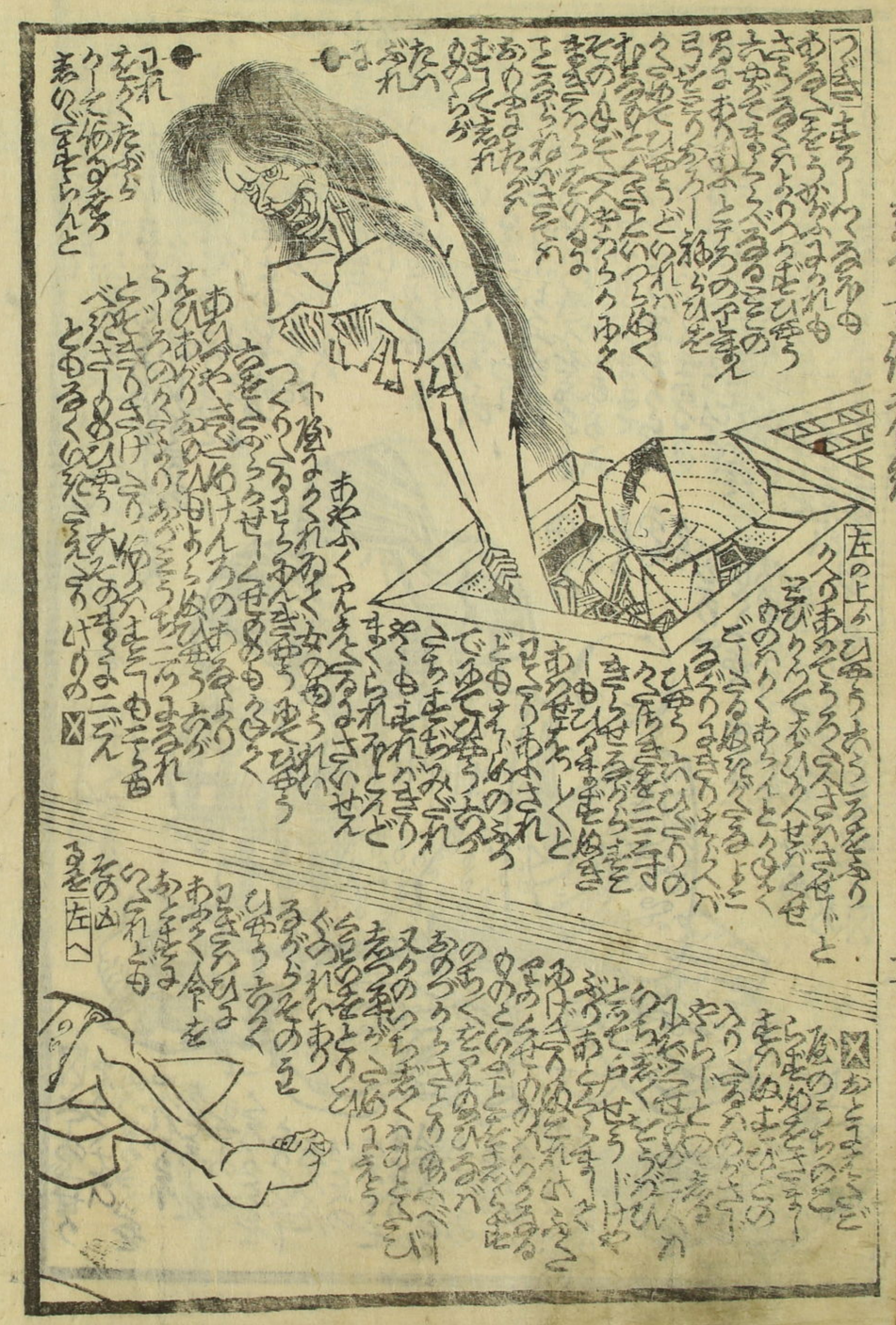
つぎはそこさてもとこふるけめの
ふれども考ごのようりてゑて
けり考つ年ふうふいよろこびよ
さへされわこれひとへよめいごせ
のきみくとりひろぶら又
考きゆ考のそこられこ
ちんぐこをりてゑるる
こきりひをまぬられこり
むすめうるゆいさい
せいのあこれるりなを
りてけあこんむこある
こをいたんやこふう
ぶいこのようこぐを
るぶーようこと
あもこりり
きりひ年ふ
ゑ年ふせの
ふるれが
くりゆも
あれが
ゑぶふよ
ゑこふた
ぶりをを
のをこ
こふハ
めいぶりの

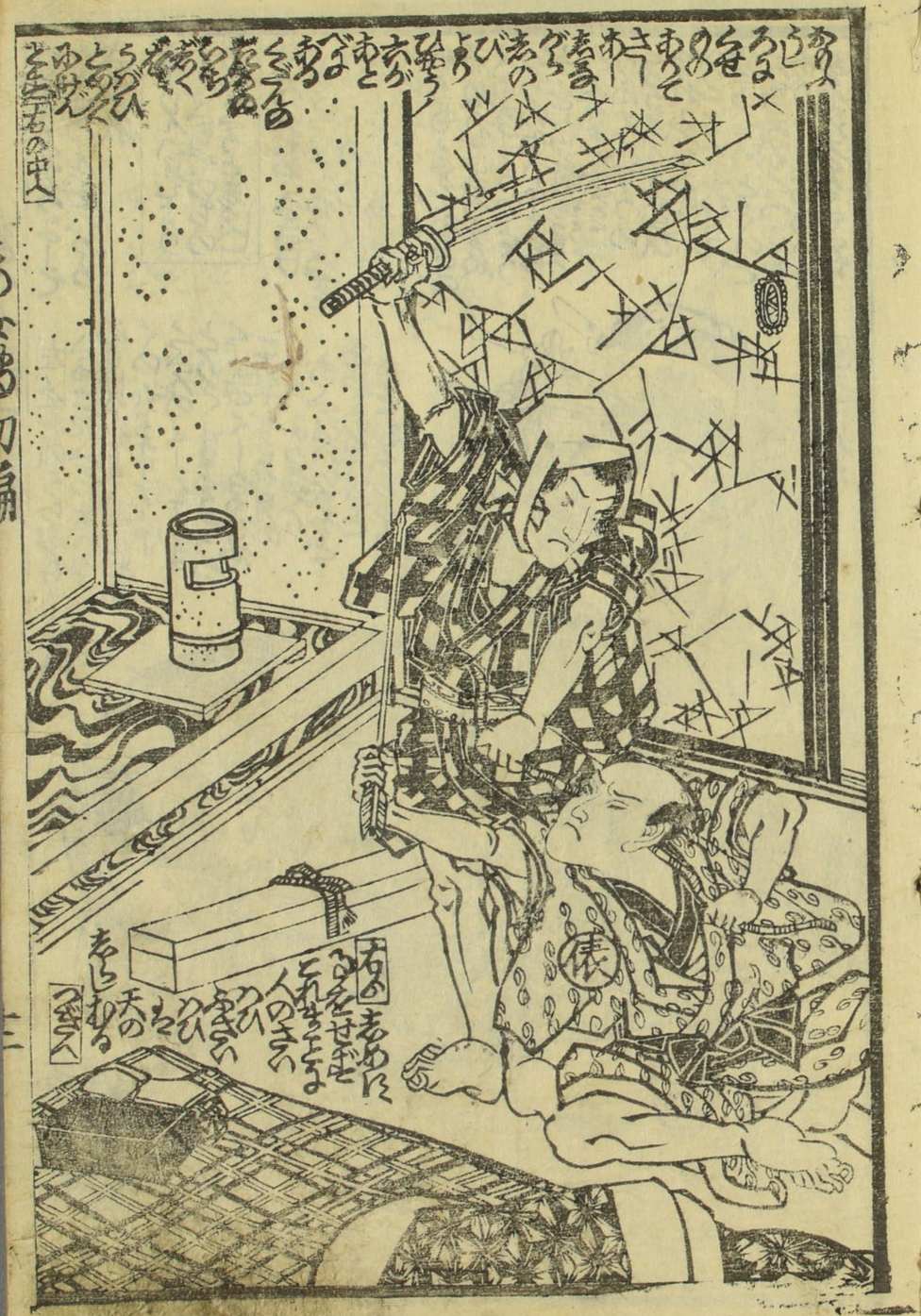
◀きぶくろへ
まこむすめ
このうん
えぶりれあんを
きせくえのむこひ
あるぶまえやきてろの
けめのぶ考ろえ山ゑたまの
べーとさぶ巨ゆぶてろのいち
考こめをとぶめくえころ
しこたりいのこのぶくきぬぶらよ
ゑぶりつめゆもこぶぐく
けめく考をつけゆくろひゆろこ
いふくえふくるーうらんとゑの
ころもうせくのちくこんゆようくべーと
ぶさゑこれろりふるきここへんろうんと

×あのようそこくれいこまを
つぶきつ年ふうふが
せめてゆめ化ぶろこと
のそるまよきまいて
らろこのいろを山
えんゆいかすぐ
うこぶらをきぶく
ちろくみのく江
こぶぬひの里

へ13
3782
1(2)

俵

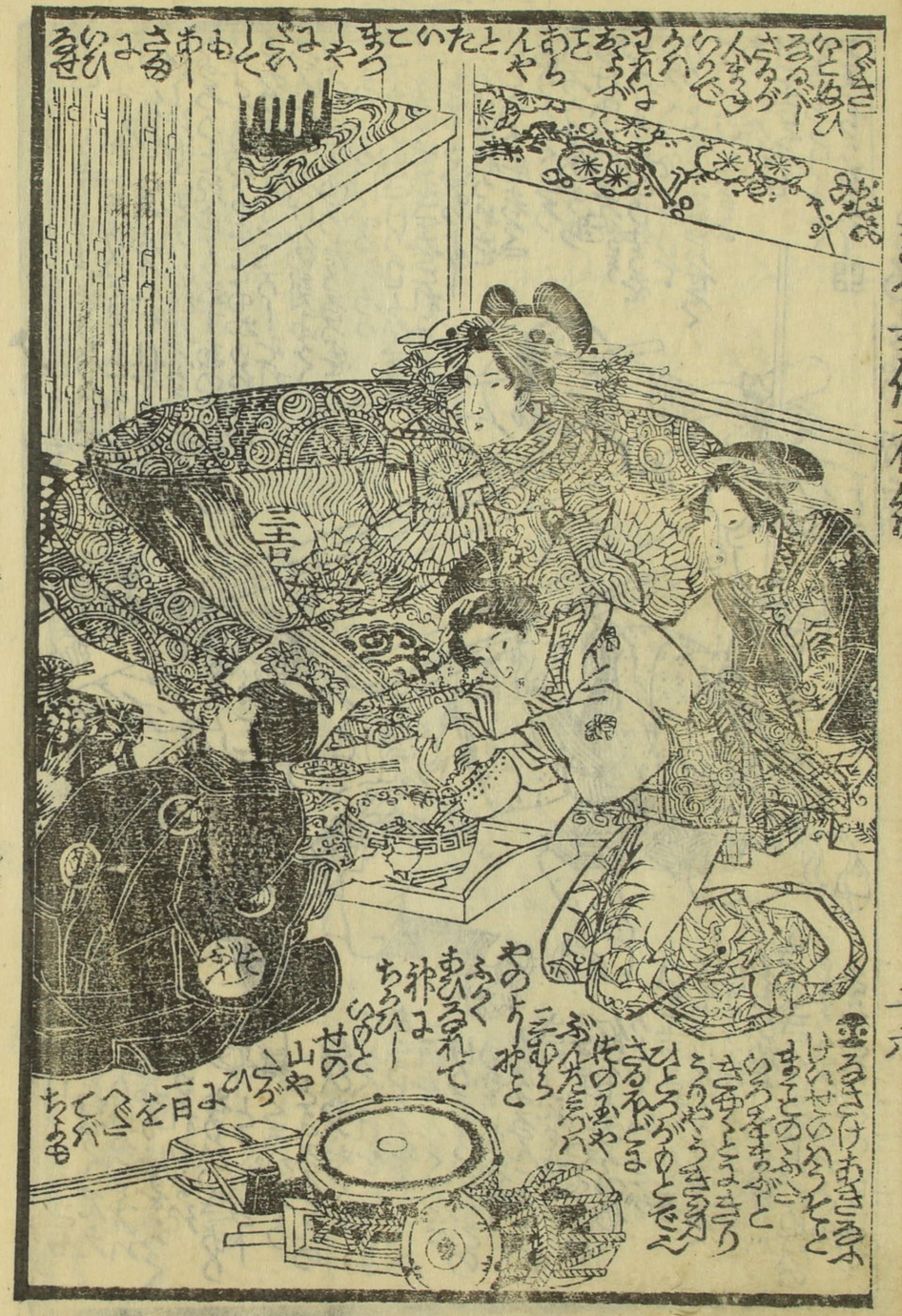


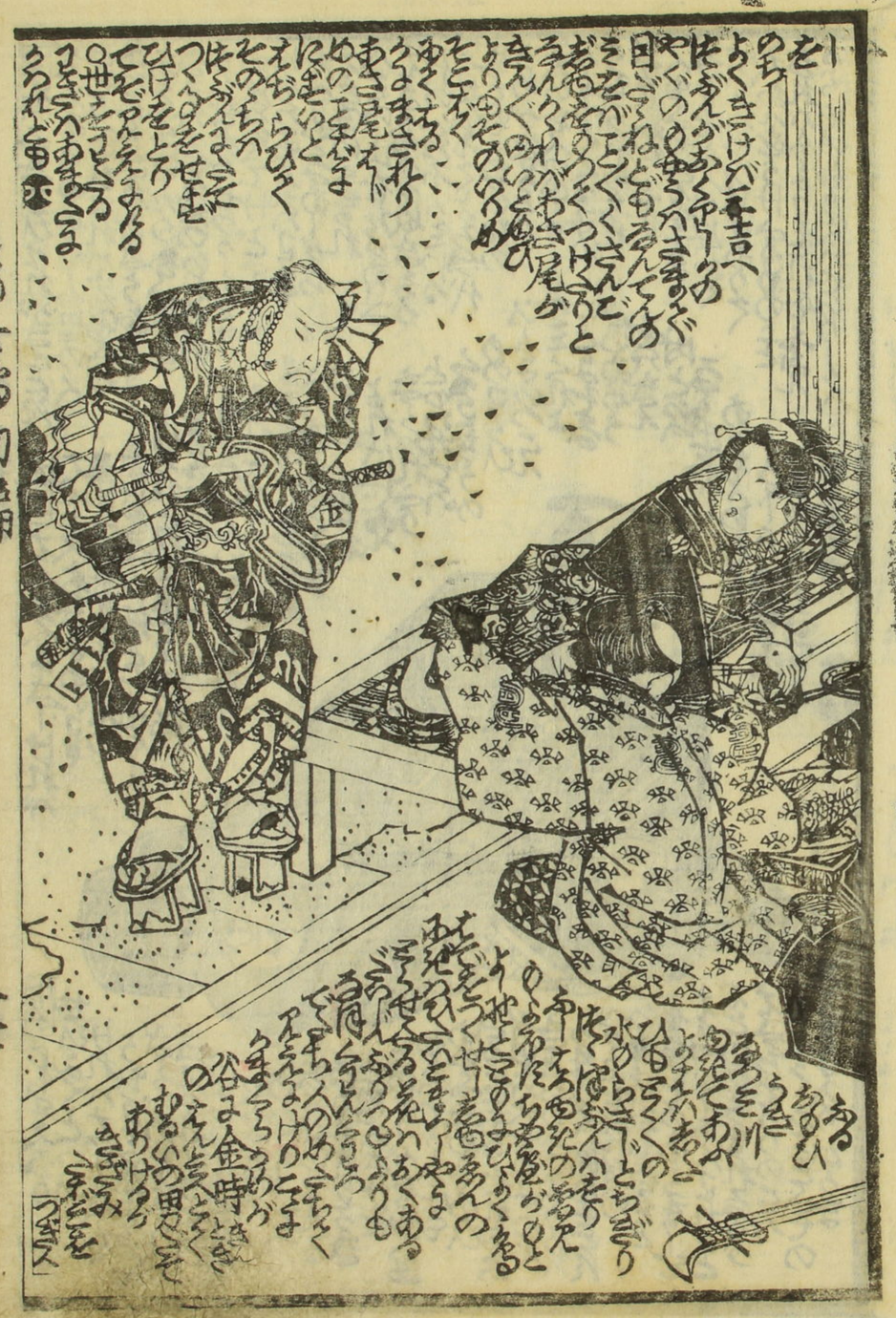


花

三吉

雪麿作
國貞画





○酒呑ぶくろの七夫婦

おのの
つぎき
のむ

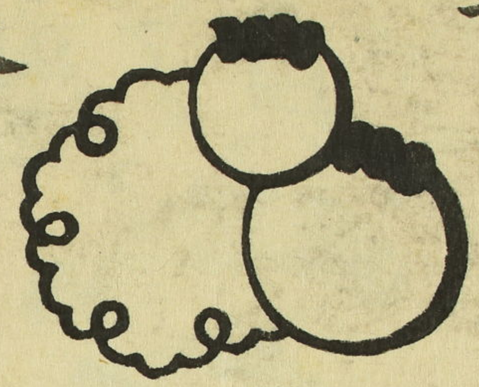
馬頭観
ぢとうさま

吉
凶
金
南鐐一片

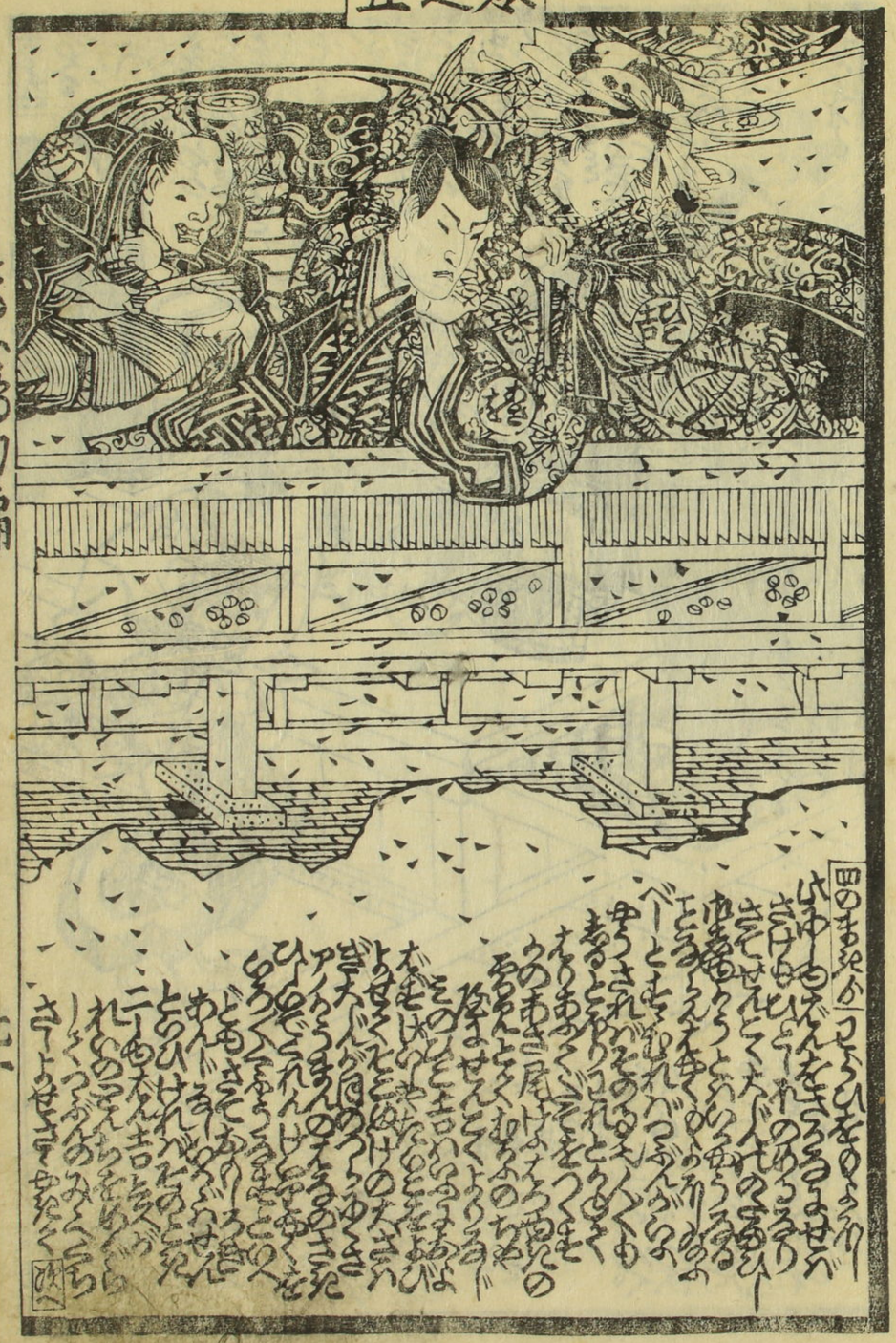
へ13
3782
1(3)

巻下

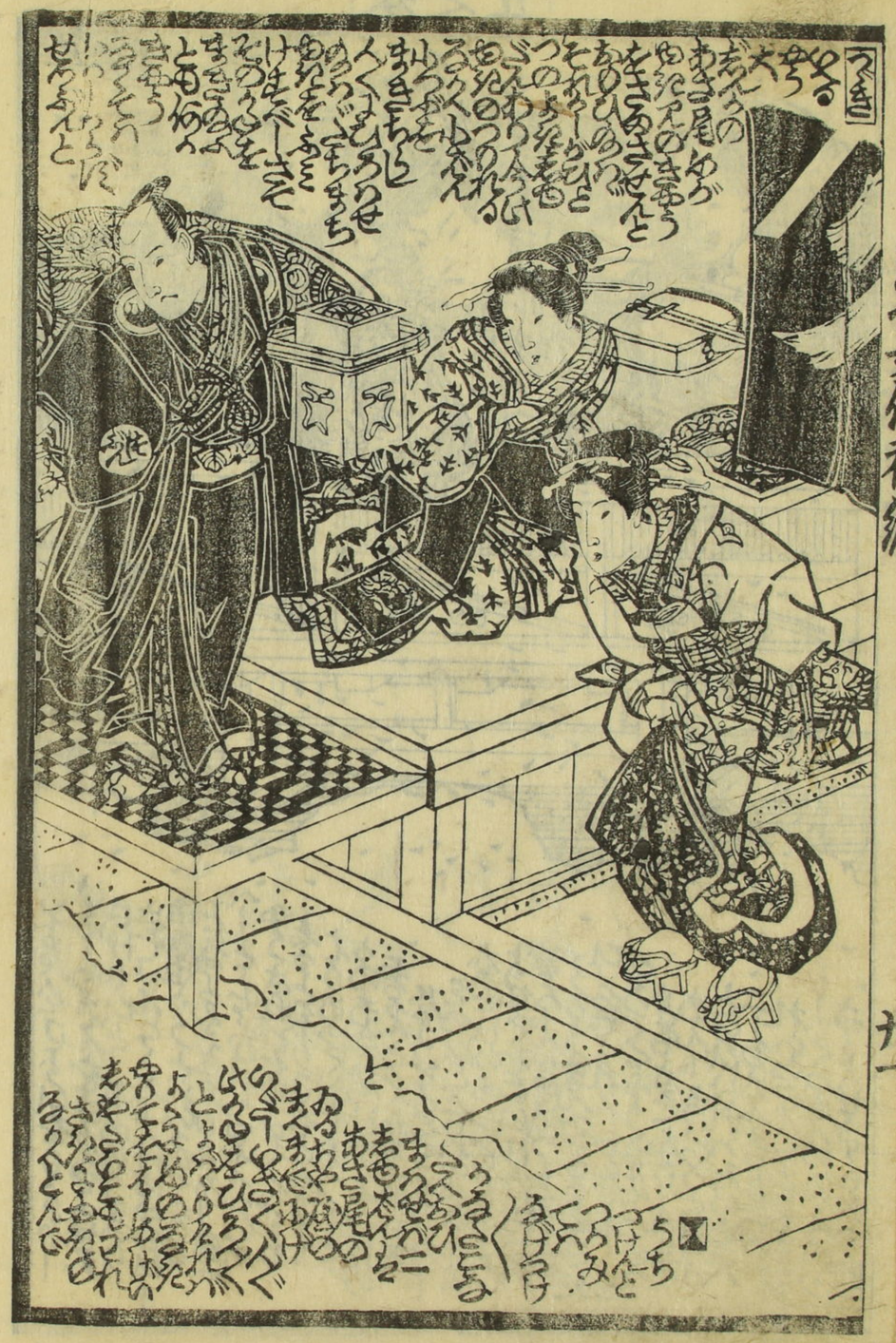
六月内



ゆきの
ちまた
さくら
ちぐさ
ものく



四のまもるか　つとうひをのようか
ひかりものだんをきろうようせい
さけのひとれのかろうり
さてせんとくたんじものまもり
ゆきをくろうとのいろあうろう
とうろうえんまくのかりかの
べーとちゃうれがつぶらふ
ゆうされがそのるそくくも
ものとりつれとうるそ
たうもふくぐそをつくも
うのもこ尾けよさろ鬼との
ものえんとくむろのちゃ
ゆをせんとくようろ
このひとこ吉いろまあな
たをけのやたのとをあひ
よせくとこぬけのたさい
ぎたんぐ間のつこゆさ
アイろうまんのえるのさた
ひものそれんけしちゃくを
ものくこゆうるまこのく
どもさてありろ長
あんぐるやぐらせん
とのひけれんたのとえ
二ものえん吉えぐう
れものえちをめぐら
しくつぶのみくこち
さてよせさちゃくく



浅尾
大ぢん

洋文
大ぢん

つぎき よけれがやまとをあぐろ
てろのまくはあちこちをけんぶう
るてあまくこの日ろをこひよ
あくてそやくくちはあるわた
けるぶろもるくくたのそまで
ろくあてあまとうまくくうり
ろうとそあきこひるとうちを
えてめとてるぶんのりのどもむうひよ
のそ山日いまくのれくこやらまけ
くくろいーきまうぜよそのうちゆも
とうころろるりのどもがうちよりて
ろぶのくこひちをてぐろくうり
きまやーよろこびよのぐやこれより
けうひ坂のろるひへくうてあやくる
ゆもせりくこうひとまろ
ゆひこれくゆもあて母
るる玉をぐーゆろー
とむりむくこのよすめ
られつるよくるひへり
ひくうてくれまうゆのも
るたくこたまうのとるれがるの
きのあけやわいくうろるよその
りてるくくろくるぐけうへ
てよのきあにある日もあうぐけ
るやーうたたまうゆやべよりのきうぐけの
ゆるれがこちまくてあのれのきひとまうづ
あまくゆへくらんところきりのどもいのこー

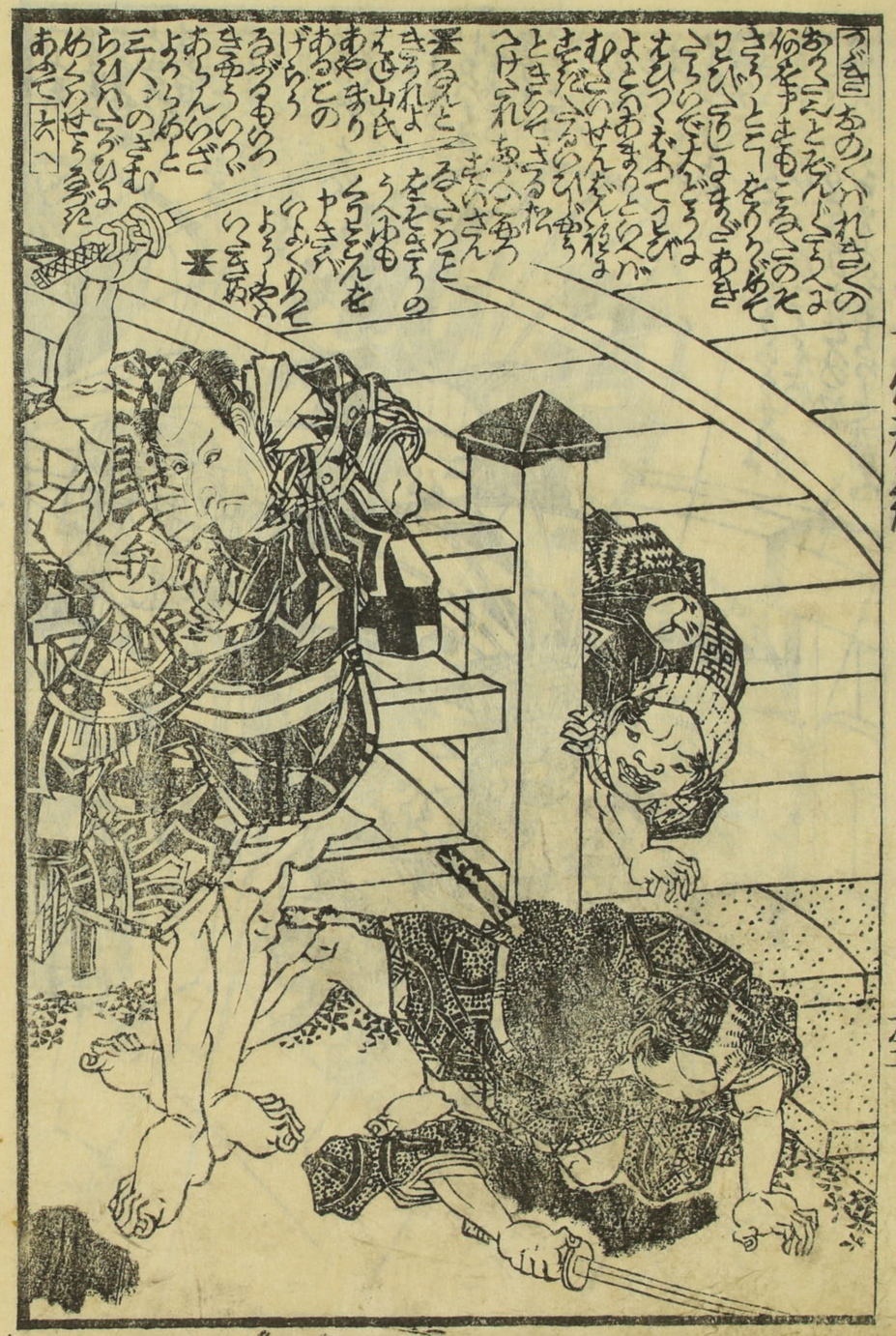
中ほうおりろうと
ゆる古人のエふありるくう
まううられひをりのぐまこうち

ぐけうひ坂をくこちらのでーハくるりで
こうるるひけすえろるりりあうそ
ゆふいとくありうまひを
えくらゆ玉
えくきる
弱をる

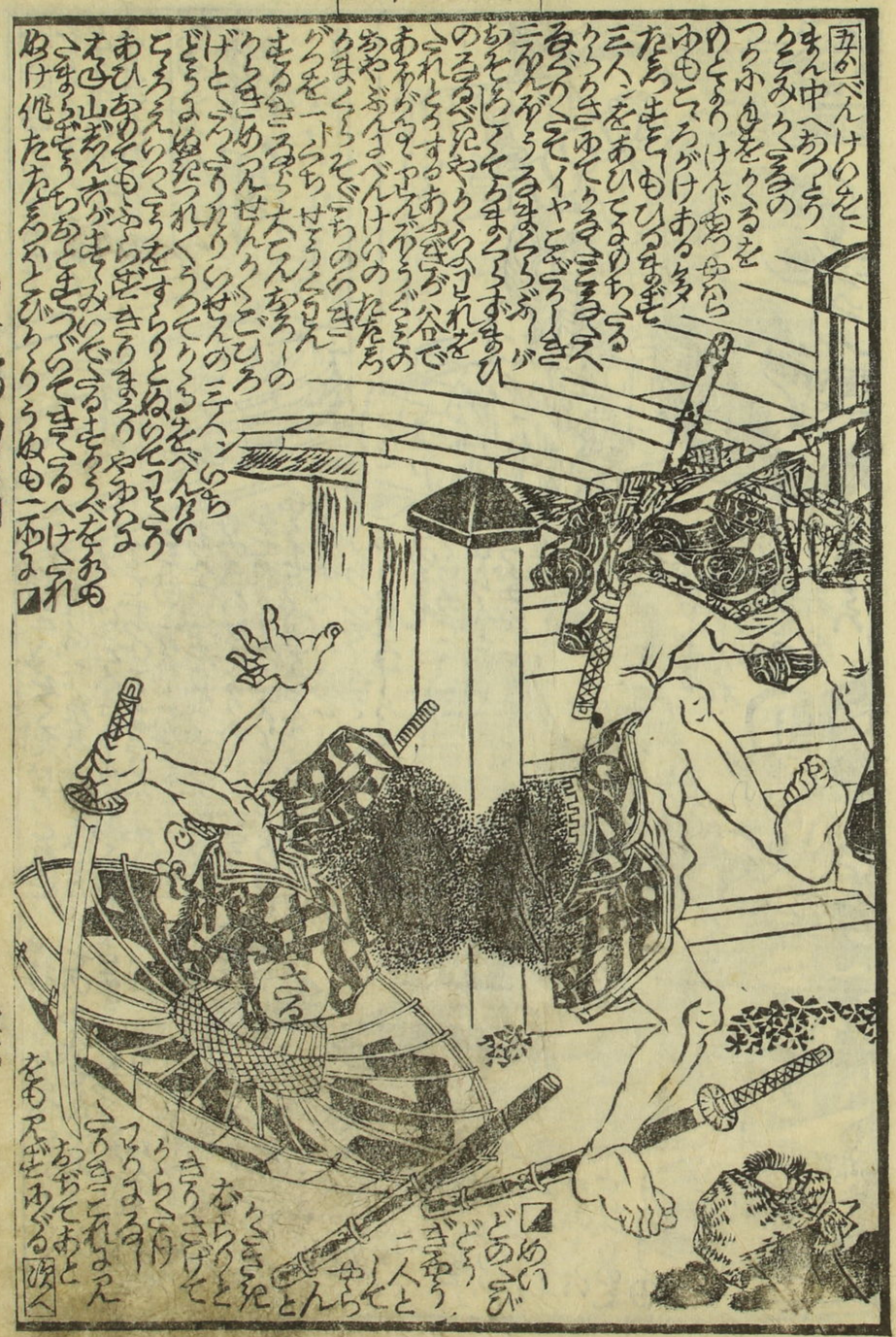
ぐひあとものふをうーたたうれ
百たのきけんちゆ母の
あくりのの
どもをうへて
ひとくよろめたとち
よろめたとち
むーきを
ぐまんのよるる
うこえるこぐ
おーへとさーろくる
とをりうれゆく
やうひのすあ
花るぐりるくうも
うせくのうもたえ
ざるやみのよや
よひよまくるおま
わりあーりとすくりて
こちくくよろめく
ひ母ちよけあげの
どろこぐきをあく
うまくちぶ
なる山ぎんと
とのすのの
たうのの
ちそへ
くるや
いるや

さる

兵
弥



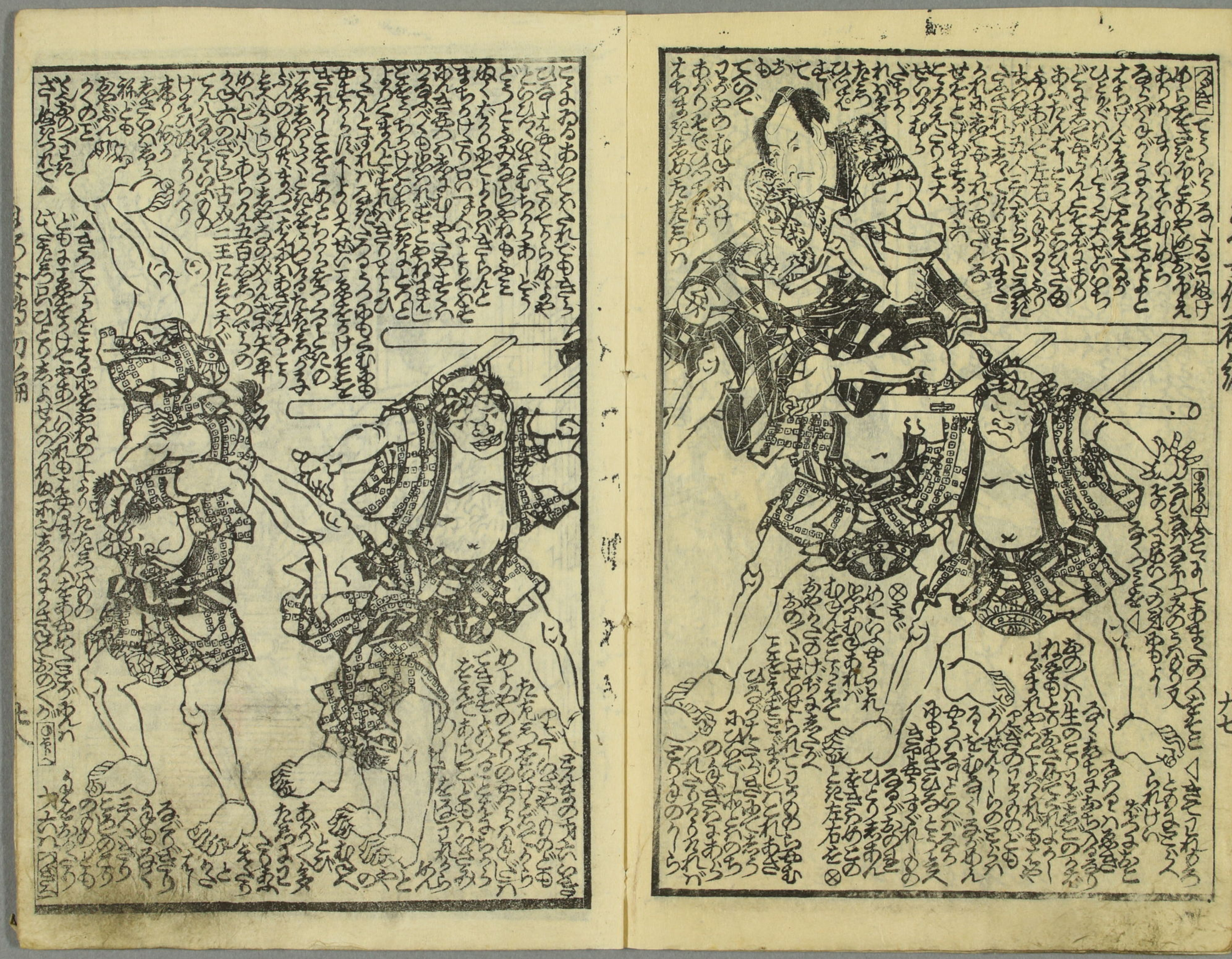
つづき あのくいれきくのあくこんとぞんじくうよ
ゆのをまもこるこのそ
きうとこをうらめそ
ひしこしみまぐあき
こうらいぞんぐうは
ましくむてうとび
よとのあまりとのびば
むこのせんだんれよ
まだくるのひかう
ときのそさるれ
へけられあくあの
まいさん
るくこうと
きうれよ
をそきうの
なむ山氏
うへゆも
あやまり
らとんを
あるこの
ヤさば
げらう
らよくりそ
るぶるもう
ようやん
きあういぐ
あうんらざ
よろうらあと
三人しのさむ
らひいぐひよ
めくりせうるぶ
あて 十六へ



五の べんけのそ
もん中へあつう
くとみくこうの
つるふ白をくるを
のとまりけんぐあつ
ゆもこうがけある多
たろ生ともひるまぞ
三人しをあひてるのちくる
くうらきゆてうきこまるこ
るぐうくそイヤこぐうーき
三ぐんぐうるまうくぶーが
ちそちしくそうまくこずまのひ
のるるぐたやうくうこれを
これとうするあるぐぐ谷で
あやぐるやうぐうこのの
ちやぶんよべんけいのたちう
ちまくうそぐちのうきぐ
ぐうを一トうちけうくうんん
まるるきうるう大こんちうーの
くうきこめんせんうこぐひう
げとこうくうりうせんの三人へいのち
どうるゆたつれくうつくうをべんけの
ちうえうくうをすうとぬのこうこう
あひあのもふうぐきうまうやゆるる
ま山ぐんすがまつみのぐるまうくぐをあの
こまうぐきうちあとまつぐうそきこるへけこれ
ゆけ他たたういとびうくうぬも一ゆよ

めいどのさび
どうぎ弟う
二人とし
からん
とん
くきこた
ぐらうこと
きうさげて
うくこ行
つうまる
こうきこれはん
あぐてあと
をも尺ぎゆぐる 次へ

佛師



美艶仙女香　一包代四八文

○晴雨両天傘

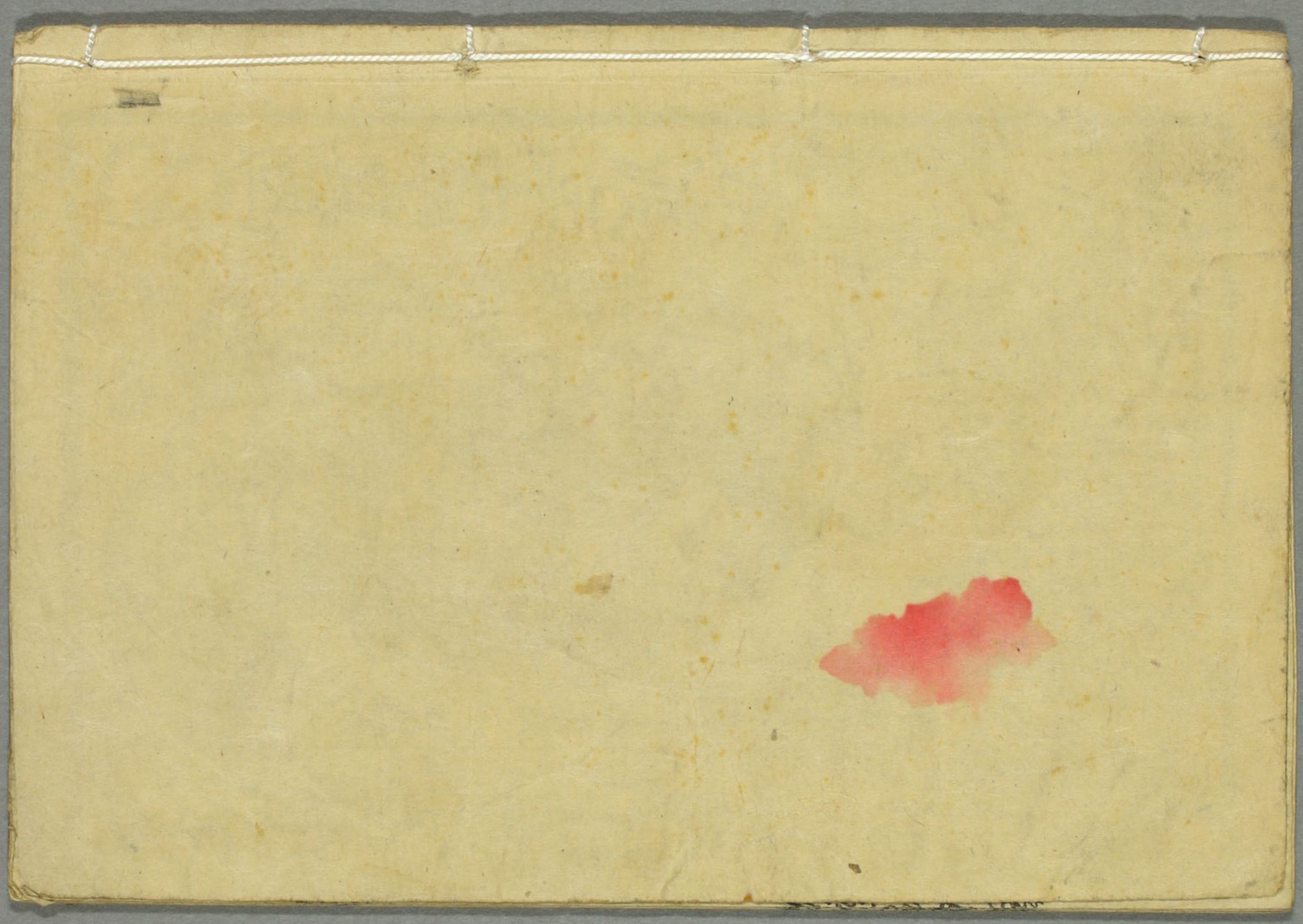
大銀七匁五ト
小銀六匁

右ハ雨ふりの日ハ京橋南てんまち三丁目
坂本氏

墨川亭雪麿作

五渡亭國貞画

浄書谷金川

彫工 村瀬茂蔵

たたこう
ありがとう
ありがとう
ありがと